

「山の神」 山に生きて山に感謝



NPO法人吉里吉里国の伐採作業の様子



町の木「けやき」の巨木で行うツリークライミングの様子（第11回薪まつり）

「山」と聞いて、あなたは何を思っていますか。8月11日は「山の日」として国民の休日となっていること、富士山は「霊峰」と呼ばれ信仰の対象となるなど、日本には山岳信仰が古くから根付いています。山を数える単位は「座」が使われていて、これは、神様のいる場所の意味があります。

広報おつち11月号で、11月11日の「鮭の日」を特集しましたが、それから1カ月後の12月12日、この日は山の仕事に携わる人にとっては特別な日となっています。

令和5年12月12日（火）の朝、小雨が降り続くなか、吉里吉里海岸近くのNPO法人吉里吉里国事務所に集った16人の会員や関係者たち。これから執り行われる安全祈願祭。毎年12月12日は、山で仕事をしている人から「山の神」と呼ばれていて、山の神様、山のめぐみに感謝す

は心の中に永く息づいているのでしよう。失われつつある習慣ではある「山の神」ですが、今後もできる限り続けていきたいです。

他の地域との共通点は「その日、山に入ってはいけない」「女性が入ると山の神様が嫉妬して天気が荒れる」ということ。大槌町にも古くから伝わるこの習慣が、山の危険を自分事として考えるきっかけとして語り継がれ、山で働く人々の安全を守っています。



る日。そして、その日は山に入ってはいけない日とされてきました。山に関わる人たちには、その日は仕事を休み、山の神様に感謝し、宴を楽しむという習慣が根付いています。午前中にご祈禱を終えたNPO法人吉里吉里国の人たちは、場所を変えてさらに集まった住民や関係者と、夕方からの宴を楽しみます。参加した人に話を聞き、山に関わる人が語り継いできた「山の神」について探ります。



釜石地方森林組合 理事兼参事 高橋 幸男 さん

自然に感謝し、安全への意識を次の世代へ

林業は、他の産業と比較して労働災害の多い業種です。幸いにも管内での重大な事故は近年発生してはいませんが、毎年8月の最終木曜日には「森林組合デー」として、必ず安全に関する話をしています。そして、12月12日の「山の神」には、完全に仕事はお休みし、ご祈禱をして、安全への意識を高める良い機会と捉えています。

ご祈禱の祝詞は、漁業、農業、林業いずれも一緒のようで自然の恵みに感謝するものとなっています。山の仕事をしていく上で、今後も自然への感謝を忘れずに、また、そのことを次の世代へも伝えていきたいです。

菊地正介さん——15歳から大工をしています。「山の神」は、猟師、大工、製材など山に携わる人全員が山に感謝する日で、いつも楽しみにしています。昔は、盛大なお祝いをしていました。大槌町で現在、この習慣を続けているのは吉里吉里国くらいではないでしょうか。

芳賀正彦さん——東日本大震災以前に長井集落で林業に携わっていた時のこと。最初の年の12月12日、寒い中、朝に水で体を清め、神社で安全祈願としてご祈禱してもらいました。林業に携わる者として「自分の身の安全と山に対しての感謝の気持ち」を心の中で山の神様に伝えました。そして、山の急斜面に立ち、危険が伴う中、作業していた自分を思い出し、自分自身を褒めてあげたい気持ちになりました。

小林清さん（長野県南牧村）——長野県の佐久地方で林業に従事しています。佐久地方周辺の地域では、毎年6月17日が「山の神」とされてい

ます。山の神様は女性で、その日に山に女性が入ると天気が荒れるといわれています。また、その容姿は醜いものといわれ、女性には嫉妬することでも知られています。そのため、醜い魚として「オコゼ」を山の神様が祭られている祠にお供えすることで、嫉妬心をなくすものとされています。